

六十三年間病気知らずの私が全身麻酔を経験しました。それは腎臓の一個を主人に移植したからでした。知人は「なぜ、すごいね」「勇気あるね」と言います。

三年前に主人は医師から「そろそろ透析導入の準備に入りましょう」と説明を受け、生きるためには透析療法を受け入れるしかありませんでした。それまでの数年間、腎機能の低下を遅らせる為に食事療法で頑張ってきました。私は管理栄養士の如く食品の栄養素を学び、毎日三度の献立を計算して食事を準備してきました。食べたい物が食べられず、量も制限して頑張ってきたのに透析療法になってしまい、「なぜ」「どうして」と言う思いで一杯でした。

透析療法のためには週三回の病院通いが必要でした。毎回機械で体の中の余分な水分と老廃物を取り除くために四時間ベッドに拘束されました。

主人は登山や溪流釣りやスポーツが得意で行動的な人でした。そんな主人から透析はさまざまな物を奪いました。なんとかして以前のような生活に戻れないかと、私は図書館通いを始め、腎臓病に関する文献を読みあさりました。

結論は「腎不全を完治させるには移植しか方法がない」ということでした。文献によると、欧米の腎移植は献腎移植が多いのに対し日本は臓器提供者数が非常に少ないため、献腎移植希望の登録をしても順番が数十年先になるということでした。また、移植した患者の八十五%は生体腎移植で、親子同胞間での移植である、といったことが現状でした。移植経験者が出版した本も多数読み、多くの人が移植して普通の生活が出来るようになり提供してくれた親兄弟に感謝していることが書かれていました。

透析療法になって一年が過ぎたある日の朝刊に、「命の贈り物・献腎の推進を願って」という市民公開シンポジウムが開催されることを知り参加しました。

透析患者数は毎年増加傾向にあり、やはり腎不全には移植しか完治する方法が無いということでした。ただ、生体腎移植の提供者であるドナーは腎臓が一個になっても七〇%機能するので身体への影響は心配がない事、腹腔鏡による手術なので傷口が小さく、術後三日でドナーは退院出来るといった最前線の医療を知ることが出来ました。改めて医学の進歩に驚きました。

司会者が「閉会の前に質問があれば挙手願います」と言われ、私は勇気を持って「生体腎移植は夫婦間でも可能か」「血液型が違うが可能か」「年齢の制限はあるのか」について質問しました。

医師は、医学の進歩と薬の開発により夫婦間で血液型が違っていても移植は可能であること、年齢は双方が一日でも若い方が良いことを説明されました。

閉会となり出口の方へ向かうと、先程の医師の姿が見えたので私は思わず駆け寄り「有難うございました」と頭を下げました。医師はやさしい口調で「いつでも相談にいらっしやい」と

言って名刺を下さいました。その時私は移植という選択に希望と未来を賭けてみようと決意しました。

そして、平成二十三年七月八日、手術の日を迎えました。目が覚めると、寒さと痛さと吐き気を感じましたが、ちょうどその時、「ご主人の手術も無事に終わりましたよ」と先生の声が聞こえました。

現在、手術から二年が過ぎ、夫婦で尾瀬沼の水芭蕉の群生を見たり、八ヶ岳で星空観賞会に感動したり、孫達と食事会をしたり、透析から解放された人生をゆっくり楽しんでいます。夫はいつも「お母さんのおかげです、有難う」と言ってくれます。

透析を始めた頃は、低血圧になり、毎日が不安でした。まさか本当にこんな穏やかな日がくるとは想像できませんでした。

あきらめずに学び続けたことで、今のこの幸せをつかめたのではないかと思います。

学びが医師との出会いという希望を導き、勇気と決断を自らに与えてくれました。これからも学び続けていこうと思います。学びは未来を輝かせてくれるからです。